
あの日の決意

沙希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日の決意

【Nコード】

N6107P

【作者名】

沙希

【あらすじ】

シュハード王国王立騎士団副隊長のアリアドナは、別隊の隊長ジエマンドから上司であるルーイスの將軍職への昇進を知らされる。その知らせはアリアドナに、昔のことを思い出させるきっかけとなった。彼女がこの『道』を選んだわけを。（旧サイトからの転載となります）

（前書き）

『空からおちるもの』の続編です。
前作に目を通してくださっていると、話しがわかりやすいかと思
います。

王立騎士団の隊長職に就く直属の上司ルースがついに、將軍職に任命される。王家の王子が名誉職として將軍を名乗ることを除けば、ルースはこの国の歴史上最も若い將軍となる。

「不本意だったかい？俺から聞いて」

そういつて困ったように頬を人差し指でかくのは、ルースの悪友ジユマンドだった。

王立騎士団は四つの隊で構成されるが、ジユマンドはその四人いる隊長の内の一人だ。

「いいえ」

直属の上司ではないがアリアドナにとってジユマンドは敬意を払うべき相手である。アリアドナは慌てて首を横にふる。

「計画通りにここまで来た。俺たちもとりあえず、一安心ってところだな。じゃあ、俺からの話しはこれで以上だ」

「はい。あの、ジユマンド隊長……」

「何だい？」

「もし、わたくしどもの隊長を訪問される予定がありましたら、

少なくともあと十時間後によろしくお願いします」

今頃恐ろしい部下の監督の下で、必死に机にかじりついているだろうルースの哀れな姿を思い浮かべ、ジュマンドは笑いながら頷いた。

ルースがアリアドナの尻にひかれている、というのは彼の中ではよく知る真実だった。

「では、失礼いたします」

アリアドナは丁重に敬意を示し、ジュマンドの執務室を後にした。王立騎士団内の廊下を歩きながら、ふとアリアドナは先ほどまで顔をつき合わせていたジュマンドの姿を思い浮かべた。

上司であるルースは勘が鋭い。恐ろしいほどに鋭く人の心をよんでくる。だが、その彼の大親友であるジュマンドも負けてはいない。

ふと、アリアドナはあの日のことを脳裏に浮べた。
この道を選んだ日のことを。

アリアドナはリシュタで生まれ育った。

リシュタはシュハード王国の王都であり、国王とそれを取り巻く貴族たちの屋敷が多く連なる場所だ。

アリアドナがちょうど十四歳の誕生日を迎えたとき、貴族の令嬢たちの中でなぜか剣術が流行った。

というのもこの流行は国王が可愛がってやまないフィビアン王女が女だらけの親衛隊を作ったことに始まったことだった。

以前から勝気な性格と男勝りな行動で周囲の度胆を抜いてきた王女だったのだが、実際彼女は口先だけでなく、剣術も馬術もそんなにそこの男には負けない腕前だった。

そのため王女は貴族の若い娘たちから絶大な人気があり、その試験会場は親衛隊入隊希望者で埋め尽くされた。しかも自身の親衛隊だと言うのに、なぜかその隊長は王女自身だというのだからおかしい話である。だがこれがまた親衛隊入隊希望者の数を増やした原因であるのは間違いない。

若い娘を虜にした（王女の崇拜者はもちろん貴族の若者も多かった。彼女は強いだけでなく、その容貌にも秀でていた。）フィビアン王女だが、破天荒な彼女の行動に眉をひそめる者は少なくなかった。多くは王女に心酔する若い娘たちの両親である。

アリアドナの両親と言えば、いい意味でも悪い意味でもおおらかな人柄だった。

裕福な男爵家の姫君だったアリアドナが剣を握りたいと言い出したときそれを快く許すだけでなく、評判のいい教師までつけたのである。しかもやるからには真剣に、中途半端に投げ出すことは許さないと言い放ったアリアドナの父が用意したその教師は王立騎士団で何十年も腕に磨きをかけた退役騎士だった。

その剣術の稽古を（実際は訓練と言って差し支えないほど厳しい

ものだった）アリアドナは周囲が驚くほど真剣に取り組んだ。

女性も王立騎士団に入団することは可能だったが、別にこの頃のアリアドナは別に騎士になろうなどとは思っていなかった。

剣術の稽古に真剣に取り組むのはあくまで稽古が楽しかったのと、何事も最期までやり抜くという父の教えがあったからだ。

自分にとって剣術は趣味の範囲。あくまでも自分の楽しみのためであって、誰かのために、何かのためにふるう剣ではない。それにそんな大層なことができるほどの腕前ではないと、そう思っていたのだ。

しかしどこから話を聞いてきたのか、フィビアン又王女の親衛隊予備軍で稽古をしないかという誘いがやってきた。

父の勧めもあり、親衛隊予備軍での稽古に参加することにしたが、はじめはあまり乗り気ではなかった。一番の理由はフィビアン又王女への強い憧れがアリアドナにはあまりなかったことだ。王女が女子の剣術を奨励してくれたおかげで、自分も剣術を始められたのは事実だがそれはそれ、これはこれである。

アリアドナには才能があった。

このままいけば間違いなくそのまま親衛隊に入隊できると周囲はアリアドナを褒め称えた。

正直、悪い気はしなかった。

幼かったアリアドナは、手に握るモノがどういふものなのか知っていたけれど、本当の意味でわかつてはいなかった。

誰かに誉められるだけで胸のなかがいっぱいになる、誇らしくなる。ただの子供だった。

「先生、それではさようなら」
「ああ、さようなら」

きつちりと会釈をするアリアドナに、退役騎士は微笑んでかえす。
アリアドナは親衛隊予備軍の稽古場の門を出た。

迎えの馬車が待つ乗り合い場までまっすぐ歩いていく。

アリアドナの顔は稽古の疲れを浮かべることなく、毅然としたものだった。ただまっすぐ、彼女の性格を表すかのよう。

ひととき大きな建物の横を通り過ぎようとした時だった。

「っ！」

通りの角を曲がった瞬間、アリアドナは突然の爆発音に驚き、咄嗟に耳を両手でふさいでいた。恐くて、その場にうずくまった。

しばらく連続して爆発は起こり、それに連鎖するようにして臭い匂いと白煙がアリアドナの鼻と目をついた。耳に痛いほど、大きく瓦礫らしきものが崩れ落ちる音もした。

通い慣れた街路は真っ白な世界へと変わったが、それよりもアリアドナの頭の方こそ真っ白だった。恐くって、苦しくって、息の仕方が分からなくなった。息を吸ってもむしろ苦しくなる一方だ。

いつそ意識を手放したくなったとき、何かあたたかいものが手に触れた。

ルースはリシュタの、最も王宮に近い屋敷で生まれた。

ようするに、都会育ちの正真正銘の貴族のお坊ちゃんだった。

上流階級、まさしくその名の通りの出自であるルースは、当然ながら幼い頃より家庭教師をつけられ、教育を受けてきた。彼は初等学校、上級学校でよい成績を修め、両親の意向どおりに王立騎士団の騎士となるべく士官学校へ進む。

ルースの才能は幼い頃から際立っていた。

何が、ではなく、ルースの才能は『苦手なものがない』ことだった。何をやらせても彼はいつも人並み以上の結果を残した。

それに彼は幼くして、人の上に立つ才覚があった。そのため近所の子供たちを使って騒動を巻き起こすこともあったのだが（巻き込まれることもあった）、大抵は彼自身の力で上手く収めることが多かった。

「まったく、お前というやつは」

それがルースの父の口癖だった。

若い伯爵が幼い息子にやる視線は常に優しさとあたたかさで満ちていた。口癖とは裏腹に伯爵が息子を誇りとしているのは疑いようがない真実だった。

「ありがとうございます」

父の口癖にそう毎回律儀に返すルースはその年頃の少年としてはおかしなほど、落着いた雰囲気をまとった子供だった。だがやはりその黒い瞳だけは、大好きで大切に尊敬する父に誉められたことを嬉しく思う少年のものだった。「ありがとうございます」そう言う時はいつも微かに口元がゆるんでいる。

「父上、どちらへ行かれるんですか？」

ある日、ルースは召使に囲まれ慌しく身支度を整える父の姿を見た。

「ああルース、陛下から急に呼ばれてね。夕餉までに帰れると思うが………いつ戻れるかよくわからないから、母上をよろしく頼むよ」

その頃、ルースの母は病気がちだった。

「はい！もちろんです」

元気のいい返事にルースの父は顔がほころび、それから二人はお互いにつこり笑いあう。

そうすると驚くほど彼らの表情は似ていた。

父がルースの頭を優しくなでた、その時だった。

爆音と共に二人の足元が崩れ落ちた。

真つ先に目に映ったのは、白い天井だった。

ぼんやりと辺りを見回す。

思考は止まったまま。

だがその時、アリアドナははっとした。

自分が爆発に巻き込まれたことを思い出したのである。

「……………ここはどこ…」

そう呟き、病院が何かであろうかと考える。しかしそれにしてもこの部屋の内装は華美だった。天井から吊り下がる電球の装飾も手のこんだものであったし、置いてある家具もアリアドナの家にあるものよりずっと素晴らしいものだった。

極めつけは額縁だけでも相当な値段がはりそうな絵画だ。

アリアドナはベッドから上半身をおこし、部屋から出ようとしたわけがわからないということがアリアドナの心を不安にさせていたのだ。

床に立ち上がって自分が素足であったことに気がつく。同時に自分が白い寝間着に着替えさせられていたことも知った。

わけがわからない。

それは恐怖だった。そして動転している自分が腹立たしかった。ふかふかのじゅうたんの上を歩いて部屋の扉のノブに手を伸ばそうとした瞬間、扉が何者かによって開けられた。

顔をのぞかしたのはアリアドナと同年代の、おそらく一つか二つ年上であろう少年だった。黒い髪に黒い目。身長はアリアドナとたいてい変わらない。自分よりほんのわずか高いだけだ。少年は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに柔和な笑顔を浮かべた。まるでアリアドナを安心させるかのよう。

「えっと、体のどこかは痛むかい？もちろん医者はずくに呼ぶけど」

「あなたは誰で、ここはどこで、私はどうしてここにいるのですか？あの爆発はあなたに関係あるのですか？」

アリアドナの矢継ぎ早の質問に、少年の顔が固まった。数秒の後に、彼はぷつと吹き出した。

「君はとても面白い」

「……質問に答えてください」

「俺が最初に質問したよ。『体のどこかは痛むかい?』」

アリアドナは舌打ちを堪えた。

「……大丈夫です」

「よかった」

少年は笑い、手にしていた薬とコップ一杯の水をベッドのすぐ傍にある机の上に置いた。

「君が寝ている間に診察してくれた医者からだ。飲むのが一番だと思うよ」

「私の質問は無視ですか?」

「僕の名前はルース・ゾイ・サイアニアス。ここはフィビアン又王女殿下の親衛隊舎のすぐ隣に立つサイアニアス伯爵家の屋敷。君はサイアニアス伯爵家当主の命を狙った爆発に巻き込まれた。そして倒れた君を家の人間が発見して手当てをした」

少年の声は淡々としていた。

「よくわかりません」

「だろっね。僕もまだよくわかってない。——父上が、死んだことを」

もう少し寝ていて構わない。君の家には連絡をしてあるから、もうすぐ迎えが来るとは思うけど。

少年——ルースはそう言っただけで部屋から出て行った。ルースが部屋から出て行った瞬間、アリアドナはどっと疲れているのを感じた。ルースにはどこも痛むところはないと言ったが、それは嘘だ。頭は痛いし、包帯の巻かれた右腕と右足、それに首がうまくまわらない。小さな切り傷もところどころある。

自分はひどく疲れている。

アリアドナは自分の意思にかかわらず、自然ともいいたベッドに倒れこんでいた。

だから次に目覚めたとき、その天井は見慣れたクリーム色、自分の部屋の天井だったとしても何の疑いも持たなかった。

全部全部、夢だったのだ。

わけのわからない爆発など、ただの夢だ。でも体中が痛い。

風邪をひいたときのように熱もあるようだった。

——夢ではなかったのだ。

ではどうやってあの少年は自分の家に連絡をしたのだろう。

ぼんやりとそんなことを考えているとすぐに母と侍女がやってきて、あれこれアリアドナの世話をし始めた。

母は曰く、アリアドナは爆発事故に巻き込まれて負傷し、近くの屋敷で治療を受けた後、自分の家に運ばれたという。

あのルースという少年は誰なのか、聞きたいことは山ほどあったが、聞けなかった。口を動かすことさえ、だるかった。

アリアドナはその後二三日、眠っては起きての繰り返しを続けた。しかし四日目の午後には熱も上がり、だいぶ回復をしていた――

――その日だった。

「目が覚めたのかい？ ずいぶんと眠っていた。それにしても君のご両親は素晴らしい方々だね。娘を怪我させてしまったというのに、僕を心から労わって下さった」

何でこの声がするのかわからない。

ゆっくりと顔を横に向ける。ベッドの近くにルースがいた。

「お見舞いに来たんだ」

「あの爆発でお父上が亡くなられたのですか？」

なんでこの質問がアリアドナの口から出たのかわからない。こんなぶしつけなこと。もっと別に質問すべき事柄があるはずだ。

「そうだよ」

「なぜ？」

「それはむしろ僕が知りたいな」

ルースが哀しそうに微笑んだ。

「君こそどうして、剣術の稽古なんてしているんだい？君のお父上に聞いたよ。君はこの男爵家の一人娘なんだってね。フィビアン又王女殿下が煽っていることだとはいえ、あまりお父上を悲しませてはいけないよ」

ルースの視線は部屋の片隅に置かれた剣をむけられていた。

「わ、わたしはただ――」

アリアドナはなぜか、答えを口にすることができなかった。

「送って下さって、ありがとうございました」

馬車から下り立ったアリアドナは車窓の中にいるジユマンドに頭を下げた。

アリアドナの後ろには落ち着いた雰囲気を漂わせる家が建っている。彼女が生まれ育った屋敷だ。

「いえいえ、どういたしまして」

ジユマンドは快活な笑顔を浮かべる。

サイアニアス伯爵家の当主が爆薬によって何者かに暗殺されてから丸二年。爆破にまきこまれた被害者であるアリアドナは何の縁か、当主の息子ルースやその親友で公爵家の息子ジェマンドと親交深めるようになっていた。

本当に不思議な縁、だ。

アリアドナは今日、ジェマンドと共にルースの父の墓参りにやって来た。ちょうど今から二年前、アリアドナは爆発にあった。あの恐怖、そう簡単には忘れられない。

今日この場にルースは来なかった。正確に言えば、来られなかった。

今日はシュハート王国士官学校進級試験日だったのだ。昨年士官

学校に見事入学をしたルースは今日の試験に受ければ、本格的な『士官』としての訓練が組まれる二年生に上げれる。おそらく、彼は進級できるだろう。それも見事な成績で。

あれから二年。彼がどんな想いを抱いて日々を生きているのか、容易には想像できない。ただ父親の死が、彼の人生の行く末を決めたことは間違いない。

ルースは見ていて心配になるほど、上しか見ていない。アリアドナは時折、彼がほんの小さな石ころで身を滅ぼすのではないかと心配になる。上ばかり見ている人間は、足元を、下を見ることを忘れてしまう。

『上に、上に立とうと思うんだ』

決意の言葉を聞いたのはつい最近だ。

何気ない会話の中で、何気なくルースは口にした。

まるで冗談を言っているように表情も口調も軽かった。けれどもその目だけは、違った。

自分は確かにあの時、目を奪われた。

アリアドナは思う。この目の前のジュマンドという男も、またルースという青年に惚れたのだ。

まさしくジュマンドが今日起こした行動が、いい証拠だ。

「本当によろしかったのですか？……その、試験をサボられて」

ジュマンドの目が丸くなる。それからすぐにジュマンドは笑いを噴出した。

「今更だな。もう今頃試験は終わっている」

ジェマンドもルースと同じで士官学校の一年生だ。試験を欠席するということは、自動的に留年、ということになる。

常識的に考えれば、友人の父親の命日に、自分の大事な試験を休んでまで墓参りをする人は、いない。いるとすればよほどの酔狂か、その友人に何か弱みを握られているとしか考えられない。

何にしても『非常識』だ。

「あいつにとって、お父上の墓参りは一つの立派な『儀式』だからな」

じつとアリアドナはジュマンドを見る。

自分ひとりで墓参りをしては駄目なのだろうか。所詮自分は部外者に過ぎないのだろうか。

そんなアリアドナの心中に気づいたのか気づかなかったのか、ジュマンドは笑う。

「何にしても、あいつは君を一人にしておくのが心配なんだ」

曖昧な表現。解釈の仕方は自由だ。

そしてジュマンドは付け加えるように言った。

「ま、実のところそもそも俺は単位が足りなくて、試験を受けられなかったただけなんだけどね」

ジユマンドはそう言い残して、馬車を走らせた。

その場に一人残されたアリアドナは、二三秒の後、くつと笑った。今の言葉が嘘か本当かは、わからない。でもジユマンドならば。

「どちらもありえるわね」

それからルークは見事試験に合格した。

アリアドナの予想通り、士官学校史上最高の成績だったらしい。

召使と共に屋敷の掃除をしていたアリアドナの元へ、ルークが訪ねてきたのはあの墓参りから一カ月後のことだった。

何事も完璧にやり遂げることを信条とするアリアドナは、自ら暖炉の中に入り込んで、煙突の掃除までしていた。

だからルークが開口一発目に言ったのは「君は本当に男爵家の

姫君かい？顔がすすだらけだぞ」だった。
アリアドナも冷静に切り替えした。

「あなたもです」

ルーイスの顔と洋服は見事にすすで汚れていた。

「君が大変そうだと思って手伝った親切心なのに、君は容赦がないな」

「ですから、居間で待っていて下さい、と言ったでしょう」

ルーイスが子供のように頬を膨らませる。

何の気まぐれか、ルーイスは煙突掃除を手伝おうとした。が、煙突掃除など経験したことのないルーイスは、見事にアリアドナの邪魔になった。

一瞬なんともいえない沈黙があって、それから二人して笑った。
お互い身なりを整えた二人は、居間に場所を移動した。アリアドナはルーイスに父親の洋服をかした。だぶだぶになるだろうと思ったのに、今に現れた彼はそれをすっきりと着こなしている。

意外だった。

優雅な動作でソファーに身を沈めたルーイスはお茶を用意するアリアドナをにこにこして、眺めていた。

「何ですか？さっきからじろじろと見て」
「いやいや、ただ君の本意が知りたくて」

「本意？」

「ああ。――なぜ士官学校への入学を決めた？」

アリアドナの手が震えた。そつと茶器をテーブルに置く。

「誰から聞きました？」

「ジユマンドから。ジユマンドに話して、私に話してくれないとは、酷いじゃないか」

「落ち着いたら、お話ししようと思っていました」

ルーイスの目が剣呑の色を帯び始めていた。

「ほう。落ち着いたら。君は士官学校に入学することを迷っているわけだ」

「いいえ、迷ってなど。それに入学の前にはちゃんとご報告する予定でした」

「入学の前？入学試験合格の報告？」

「はい」

知らず知らずのうちに、アリアドナは拳を強く握り締めていた。自分は間違ったことなどしてはいない。けれど、警鐘が脳裏で激しく響いている。自分は今、ルーイスの神経を逆撫でしている、と。

「俺が聞きたいのはそんなことじゃない。どうして『士官学校』

なんだ？」

ルースは声を荒げているわけではない。けれどルースの心は乱れている。直感でわかる。

「君は人殺しなんてしたくないだろう」

君までこちらに来ることはない。

「どうしてだ？」

この道は君を苦しめるだけだ。

「見つけてしまったからです」

アリアドナは真っ直ぐとルースを見上げる。口元には微かに優しい微笑を浮かべて。

「昔、あなたは聞きました。どうして剣なんてものを握るのか、と」

あの頃はただ剣術の腕をほめられて嬉しくて、それがどれほど重いモノなのか、よくわからずにいた。今でも実感しているわけでも、身をもって知っているわけでもない。

ただ、見つけてしまったのだ。

自分の剣の腕前を生かす方法を。

「その理由を見つけたんです。だから私は士官学校に入学しようと思います」

守り抜きたいと願う者を見つけてしまったのだ。彼の野望の行く末を見届けようと思ってしまった。

自分はきつと愚かなのだろう。

でもなぜこんなにも心は晴れやかなのだろう。後悔など考えもしないのだろう。

その答えをすでにアリアドナは知っている。

だから微笑みすら、浮かべられるのだ。

ルースはその黒髪を盛大にかきむしった。

イラついてはいるが、その顔は怒っているというより、むしろ困っている。勘のいい彼にはアリアドナの『理由』を正確とまではいかなくとも、何となくは察したのだ。

軽く溜息を吐いて、ルースは問う。

「いいのか？きつと安穩とした未来を手に入れることはできないぞ」

「もう決めたんです」

「君は強情だな」

ルースはようやく表情をゆるめた。

ルース隊の副参謀とも呼ばれるカルロスは、その上司の哀れな姿を見て盛大に笑いかけた。だが今月の給料をすでにすっかり切り切らしていることを思い出し、慌てて口を自身の両手でふさぐ。

隊長の機嫌を損ねて来月の給料を減らされるわけにはいかないからである。

カルロスが残りの少ない金で今月をどう乗り切るのか頭を悩ます中、シュハード王国一有名で人気があると言われる王立騎士団隊長の表情はどんどん青くなっていた。

「隊長」

「なんだね、アリアドナ副隊長」

カルロスといった主だった部下たちの見守る中、ルースはアリアドナに首根っこをつかまれていた。上司に対する無礼な働きも、彼女には暗黙のうちに許されている。彼女に意見する勇気のある人

間は、ルース隊の中に誰一人として存在しなかった。

「ご自身の人気を落としたくなければこれ以上逃げ出すことなく、どうぞ大人しくこちらの書類を片付けて下さい」

外へ逃げ出そうとしていたルースは恨めしそうに窓から空を見上げた。白い雪が地上に降り注いでいる。

こんな寒い日はさつさと屋敷に帰って暖炉のある部屋で眠りたい。あの日、あの時、誰がこんな未来を予想したであろうか。

やっぱり、君の士官学校入学を全力で阻むべきだったよ。

そう心の中で呟くと、ルースは肩をおとした。

「よっ！ルースっ！急だがフィビアン王女から今晚の晩餐会の招待を受けたんだがお前もどうだ」

その時、現れたのは隣の隊舎の隊長ジェマンドだった。

救世主の登場にルースは目を輝かす。

「おおっ！ジェマンドっ！！！行くぞ！絶対に——」

未まで言い切る前に、ルースの肩にそっと冷たい手がのせられる。

「隊長」

絶対零度の声音にルースの顔が一気に青ざめる。

「ジェ、ジェマンド、すまないが今日は忙しいんだ。王女殿下にどうかよろしく伝えてくれ。そりゃじゃあ失礼するよ!」

ルースはそう早口で言い切ると、隣の執務室に逃げ込むように入っていった。

「申し訳ありませんが、そういうことですので」

アリアドナはジェマンドに頭を下げる。

長年の付き合いからすべてを察したジェマンドは笑う。

「ルース隊は優秀な副隊長のおかげで今日も業務円滑だな」
「だいいいんですが」

すましたアリアドナにそれまでやりとりを黙って聞いていたカルロスは今度こそ爆笑する。

カルロスが優秀な副隊長の厚意で減給されるのは来月のことだっ

た。

（後書き）

こんにちは！

最後まで読んでくださって、ありがとうございます。

今回は『空からおちるもの』の続編でしたが、

（続編というより、過去編と言ったほうがふさわしいかもしれません。）

次にこのシリーズを書くときは

長編で頑張ろうと思います！

その時にはルイスに死に物狂いで頑張ってもらう予定です笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6107p/>

あの日の決意

2011年10月8日02時28分発行